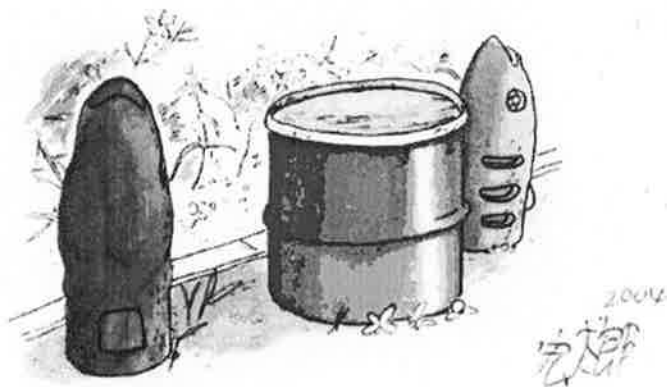


おもしろ子育て奮闘記

～よんで元気になる体験談～

Part. 1



作成 / 平成 22 年度 わくわく子どもまつり in 岡山ドーム
公民館発達障害支援グループ

は

じ

め

に

昨年（平成21年）の『わくわく子どもまつり in 岡山ドーム』へ初めて発達障害ブースを設けたところ、予想以上に反響がありました。

そこで今年は、「私はこんなふうに子育てをしてきたよ」「仲間がいるんだよ」という思いを伝えたくて、公民館などで活動をしているグループの皆さんからメッセージを募集したところ、たくさんの方から熱い思いが届きました。

紙面の都合により一部の方のメッセージ紹介になりますが、読んで元気や笑顔になれたらうれしいです。そして、一歩勇気を出して親の会や勉強会を覗いてみてください。あなたの気持ちをわかってくれる仲間と出会えますよ（*^*）

目 次

第1章 発達障害の子どもを持つ親のみなさんへ ～同じ立場の親たちより、メッセージ～ 1
第2章 私の子育て体験記 ～涙あり、笑いあり～ 6
第3章 発達障害の子どもたち・保護者を サポートする側から ～メッセージ・活動紹介～ 14

第1章 発達障害の子どもを持つ親のみなさんへ

～同じ立場の親たちより、メッセージ～

大変な日々を過ごしたからこそ、 些細な幸せが何倍にも感じられる

他の子と何か違う…
どうしてこんなに変なことばかりするの…

どうして私の子だけが障害者なの？
一体この先どうなるの？

毎日、暗くて出口の無いトンネルの中で過ごして
いる気分だったあの頃…

でも時間が経てば子供も親も成長するものです。

今、子供は自分でできる事も増え、親を手伝って
くれる事もあります。親は子供の成長の喜びを、
周囲の親の何倍も噛みしめながら過ごして
います。

大変な日々を過ごしたからこそ、些細な幸せが
何倍にも感じられるんですよ？

10年後、20年後、きっと今より幸せな時間が
増えていますよ。

(N)



絵画：堀田遥華さん（高1）

（冊子中の絵画はすべて）

息子のおかげで出会えた人がたくさんいる

告知を受けた日から、いろんなことがあった。
道に迷ったり、頭をぶつけたり、転んでしまったり。
頭はボコボコ、心もあちこちキズだらけ。でもその
度に、誰かが助けてくれた。

耳元で囁いてくれたり、遠くから明かりを翳して
くれた。やさしく厳しく「自分で考えなさい」と言って
くれた。いっぱい涙も流したけれど、息子のおかげ
で出会えた人がたくさんいる。有難いと思う。

ボコボコの頭も、あちこちのキズも時間とともに
癒えたけれど、キズあとは隠さずにいようと思う。
忘れないために。

そして私は、いつかあの時、遠くに見えた明か
りになればいいなと思う。

(K)

診断された時は辛かったけど、わかって良かった

「泣いたり怒ったり物にあたったり…。どうしたら良いかわ
からず、困っていたんだね。」

わが子に障害があると診断された時は辛かったけど、わ
かって良かった。

知らずに育てていたら、もっといっぱい辛い出来事にも気
がつかなかっただろうから。

優しく頑張りやでピュアな心の持ち主の彼は私の誇り。
涙が出ることもあるだろうけど、大変な今もいつか必ず
懐かしい思い出に変わるから、笑顔のお母さんでいて
下さい。

(A)

無駄なことは一つも有りませんでした

親の会に入り、年代の違うお母さんにたくさん話を聞いてもらいました。涙も流しましたが、その次には笑顔が出せるようになりました。大変なのは私だけじゃない、と思うと、前向きになれました。無駄なことは一つも有りませんでした。やった数だけ子どもは強くなれますよ。

(S)



好きな事は自信と力になります

今年24歳になる息子が自閉症と診断されたのは、彼が3歳のころです。

きっかけは自傷行為からでした。一つ問題行動やパニックがおき、やっと解決したかと思えば、また一つ新しい問題がおきるその繰り返しでした。

その当時、まだ自閉症の障害特性が明らかになっておらず、彼のことを理解していただける人は周りにはいませんでした。

そのような状況でも私たちは彼の可能性を信じていましたし、彼の可能性を引き出すために多くの時間を割いてきました。

その当時、障害を受容できず、不安を抱えていた私たちが彼の可能性を信じる親になれたのは、その当時、同じような障害児をお持ちの先輩の親御さんが日々生き活きと子育てをしている姿に接することができたからです。

「定型発達のお子さんとは確かに発達が遅れている部分はあるかもしれないが、日々間違いなく彼らは成長しているのです。その成長を素直に喜べる親にならないと」その言葉は、今でも私の中にしっかり残っています。

障害特性を理解することは、当然必要ですが彼が彼らしく生きることを視点にして、彼の社会性の原点は家庭である、という思いで子育てをしてきました。

またそのために、日々の関わりの視点を持つ母親と、将来の視点を持つ父親双方が子育てにかかわる必要があると思っています。

この子のおかげで沢山の方と知り合うことができました。(これは私たちの大きな力にもなっています)

犬を家族の一員として迎え、規則正しい生活を今でもおこなっていますし、家族のなかでの役割、居場所がきちんとあります。

今では好きな事を仕事にして頑張っています。決して安定した職業ではありませんが、何よりも子どもが頑張れることなので応援してやりたいです。

好きな事は自信と力になります。

(H.I & T.I)

障がいがあることが不幸なのではなく、 障がいに応じた適切な支援が受けられないことこそ不幸

子どもは、小学校入学前に発達障がいと診断されました。
診断を受けるまでは、子どもの行動に「なぜこんな事をするのだろう。」「あれが出来るのに、なぜこれは出来ないのだろう。」と疑問が多く、上の子どもとの違いに戸惑うことが多くありました。
診断後は本や講演会などで勉強し、子どもを理解し受け入れること、子どもが困っていることを見極めて支援をしていく大切さを学びました。

更に、親の会に参加することで大変なのは自分だけではないと分かり、お互いの子育ての様子を聞き合うことで支援のコツを学んだり情報交換やストレス発散の場となり、力を貰うことができました。

成長過程で起こる様々なトラブルは専門家のアドバイスを基に、子どもを取り巻く教育・医療・地域の連携した支援を求めながら一つ一つ解決策を見つけて行きました。沢山の方に支えられながらの子育てでした。助けて頂いた方には感謝の気持ちでいっぱいです。

子どもが落ち着いて生活できる環境を整えて行くには、親が子どもの困り感にきちんと気付いてやること。どこに相談したら良いのか、どんな支援が受けられるのか常にアンテナを張って情報収集すること。親自身が人とのコミュニケーションを大切に、支えてくださっている人が周囲に存在していることに感謝の念を忘れないことが必要だと体験を通して感じています。

今、子どもは中学生。生き生きと毎日の生活を楽しむ事が出来ています。不登校・登校渋りや授業参加拒否などが続き、親子とも疲れ果ててすり切れ状態であった頃が嘘のような毎日です。小さなトラブルは多少なりと有りますが、子ども自らの力で解決していく力も付いてきました。特にここ1、2年の成長ぶりには驚かされるものが有ります。

親の私も、子どもが発達障がいであると分かるまでは意識して目を向けることが無かった教育・福祉・社会問題などに広く意識を向けるようになりました。親の会活動も初めは我が子のことを何とかしたいという思いからの出発でしたが、今では障がいを持つ子どもたちが過しやすい社会について考える立場へと変わってきた自分に驚いています。

障がいがあることが不幸なのではなく、障がいに応じた適切な支援が受けられないことこそ不幸なことであると思います。どんな障がいがあっても、世の中が受け入れる力を持った成熟した社会であれば生きていけることを皆さんに理解して頂きたいと思っています。

(K)

子供は少しずつちゃんと成長する

不安や悩みは尽きませんが、相談にのってくれる友達や支援して下さる方達があります。

大変な事もあるけれど、子供は少しずつちゃんと成長していきますよ。我が子の為なら頑張れます。

(I)

落ち込んで、泣いた日もあったけれど・・・そう、なんとかなります

平成11年初夏、我が家に次男(現在小5)が誕生しました。

何につけても一月ほど遅れてはいたものの、一才半まで困ることは余りありませんでした。

ただ、変わっている子だなあと思うところはいくつかあり、離乳食でおかゆは全く食べませんでした。偏食も激しく、白米のみで大きくなったような気がします。また、どんなに苦心してアイスにほんの少し、ヨーグルトにちょっぴりと薬を入れても何か見透かしたように、手をつけませんでした。靴下・靴を脱いで公園で遊んだり、歩けるようになって、公園中をほふく前進したり。こうやって書き出すと、十分困っていたじゃないか>私。障害、障害、障害、障害、きつと、ずっと、考えつつ、否定しつつ、そんな日々だったかな・・・と思います。

一才半検診で言葉がないことを指摘されました。ウルトラマンやスーパー戦隊が全種類言えるということで、喋れると思うおとしていました。ですが、実際会話が出来るわけではありませんでした。

病院の発達検査は軽度の自閉症。主治医に「病気ではなく、障がいなので一生直りません」と言われました。今となっては、「個性の一部」など曖昧な告知を受けなかったことに感謝しています。

小学校は学区外を選択しました。

学校内での理解と支援はあり、療育は療育で上手いき、友達も出来、いろんな人に支えられているという実感ができていましたが、家庭と学校(保育園)という両輪の足並みがそろわなければ、とても難しいという思いは常にありました。「やっと居場所が出来た」と思えた時でした。

今も大変なことは日々あります。

ただ、ウルセーはほとんど言わなくなりましたし、好きなテレビが終わるときは、チャンネルを変えています。長袖から半袖にはなかなか変わりにくいですが、クラスの様子を見て「俺も半袖にしようかな」と言ったり、日にちを決めて切り替えが出来るようになっていきます。出かけるときは靴下をはくし、褒められたら「いやあ、それほどでも・・・」を決め文句にして乗り切っているようです。

また良い事がどうか一概には言えませんが、ゲーム・漫画なども「そんなことをさせているから、叩いたり、言葉遣いが悪くなったりするのでは？」と言われたりもしました。でも禁止してしまうのは一番簡単なこと。時間を決めてルールを教えれば、得ることもたくさんあります。本や漫画も好きで、私も知らない難しい言葉を知っていたり、習っていない漢字が読めたり、野球やサッカーのルールを覚えたり。実際、野球やサッカーをしなくても、試合を見て楽しむことが出来れば、またそこから何か得られるものが出来てくるはずです。

小さいうちは成長の振り返り幅が無く、小学校以前では日々が親子共々つらい日々で、泥の海の中を必死で泳いでいたような気がします。薬をも掴む思いで行ける限りの勉強会に出かけたり、教材に飛びついたり、たくさん失敗をしました。落ち込んで、泣いた日もあったけれど、空を見て、ご飯を食べて、コーヒ一飲んで、なんとかなるさ。そう、なんとかなります。親も子も少しずつ、少しずつ。長い時間、子育てを楽しむのは、案外幸せなことかもしれません。

(T)

「障害」とはレッテルではなく、 一人一人がその人らしく生きていける、生きるためのパスポート

今娘は高校生。

成長がゆっくりの何処にでもいる女の子です。

小さいときは、食が細くて食べられないものも多く、においにも過敏、困ることもありました。

多動や騒ぐ形のパニックが無く、幼稚園でも、おとなしく内弁慶な子、と見られていました。

幼稚園に入園して少しした頃、行けなくなりました。

その時は分かりませんでした。周りの状況が読めないし不安が強かった、だけど誰に何て言えばいいのか分からなくて、唯一の存在だった母親から離れられなかったのでしょう。

「困っているときは、困っています。分からないときは、分かりません。そう先生に言えばいいよ。」
そんな風に話した時、少しだけ安心した娘を今も思い出されます。

今娘は、公民館内でボランティアをさせていただいています。

核家族の中で育ってきたので、祖父や祖母の年代の方との関わりは貴重な経験となっています。

自分の子どもに障害があるということは、受け入れにくいことかもしれません。でも、目の前で精一杯努力しているわが子を受け止め、認め、ほめ、応援すること。その積み重ねが、子どもの自信に繋がってきたように思います。

後数年すると、自分の足で立って、周りの人に少し支援を受けながら、歩き始める娘。

「障害」とはレッテルではなく、一人一人がその人らしく生きていける、生きるためのパスポート。そんな風に見方を変えることで、親自身もずいぶん楽になるのではないかと、自分を振り返って感じています。

娘を通して多くの方とつながりが生まれ、地域や社会って温かい場所だと気づかせてもらえました。

これから先もいろいろな事があるでしょうが、親も強くなり、何とかなるよねって気分です。

(M)

第2章 私の子育て体験談

～涙あり、笑いあり～

辛くて長かった幼児期 ～診断を受けるまで (ペンネーム/のんママ)

私の子ども、のんちゃんは 1,096g という本当に小さい赤ちゃんとして生まれてきました。

生後間もなく感染症にかかり、後遺症で右足の骨に変形があるため数回の手術を受けています。

小1の時には心臓の手術もうけ、他にもいろいろあって病院通いが続いていたので、まず普通の健常な子供とは違うだろうということが常に頭の中にはありました。育てにくさは身体的な発育の問題としてとらえていました。

それにしても乳幼児期はともしんどい状態が続いたので、見かねた保育園の園長先生に「一緒に児童相談所に行きましょう。」と声をかけられた時、素直な気持ちで行くことができました。

今から大体10年ほど前の話です。最近のお母さんでも「児童相談所に」と言われたらショックを受ける人が多いようですが、私には園長先生の児相へのお誘いは初めの一歩だったような気がします。

幼児期ののんちゃんは、20回近く名前を呼んでも振り向いて返事をしてくれない、「違うよ」という言葉を聞き入れてくれないので同じ失敗を何度も繰り返す、また、道具の使い方や手順が違うので最後には道具が使えなくなってしまうので叱られる、抱いてもすぐ反り返って嫌がり、歩きだしたら（危ないので手をつなごうとするのですが）今度はこちらの手を振り払って走り出す、など本当に大変でした。

ミルクは飲んでもすぐ吐いてしまうことが多く、離乳の時期にはアーンしてねとスプーンを持っていくとプイッ、もう一度持っていくと今度は反対側にプイッ。そばに、同居している母がいる時は最悪で、「あんたの作るものがうもうないんじゃわ」などと言われながらの食事で楽しい時間ではなく、多動もひどかったりしたのでベルトで体を椅子に固定してみたり・・・食事の時間が子供にも自分にも苦痛の時間になってしまいました。辛かった話はあげればきりが無いのですが、とりあえず児相から旭川

荘の児童院に通うように勧められ、月に2回通院して療育を受けることになりました。児相でも児童院でも詳しく説明はされず、「未熟児で生まれた子の3人に1人は発達の遅れがある」という程度のもので、よくわからないまま通院することになりました。

当時、私には車の免許がなかったので、バスを乗り継いでの通院はとても時間と体力が要りました。

療育の意味が良く分からないうえ、家族には、「バス代や診療の費用がかかるし、半日家をあけるから家事がきちんとこなせてない」と非難されながら通っていたので、次第に通院できなくなりました。

それならば、せめてできることはしようと、毎日、保育園に早めに迎えにいった、のんちゃんが他の子とのやり取りの中で困っていることはないか観察させてもらい、時には介入したりしながらそれまでのお友達関係がこわれないように努めました。

「ほら、アンパンマンだよ！」とお友達が粘土で作ってくれた時など、「ありがとう！」と言いながら手にしたとたんに丸めてしまったりするので（のんちゃんには粘土は手にしたらとりあえず丸めるものになってました）、その場において良かったー！というようなことがたびたびありました。

きっと、当時の園の先生の中には「過保護な親！」と思った方もいたでしょう。

しばらく頑張ってみたのですが、頑張り方が間違っていたようで、のんちゃんにはチックが始め、私の顔からは笑顔が無くなりました。

小学校に上がって間もない頃だと思いますが、子どもに「お母さん、笑って。」とまで言われるようになっていたある日、いつも通っている大学病院の小児科で「行動異常、自閉症外来」の張り紙を見つけ、そこで初めて、専門の先生から、この子がどのような状態にあるかを教えられたわけです。

「お母さん、のぞみちゃんはね、朝、目が覚めた時に、私は今日どうなってしまうのだろうという不安な気持ちで一日が始まっていると思って下さい。」

主治医の先生の言葉はとてもわかりやすく、今まで怒鳴ったりたいたりしてしまっていた自分に大きな反省と、これから育てなおすためのヒントをもたらしてくれました。



保育園の娘を育てる日々 - 周囲に理解者を増やしながら - (バンネーム/かあちゃん)

双子の娘の母です。娘は二卵性なので、顔も違いますが、性格も違います。初めは単なる性格の違いだと思っていましたが、それだけではない、という事を1歳半健診で指摘され、産まれた病院の双子の会でも、看護師さんに受診するよう勧められ、そして、『広汎性発達障害』という言葉を知りました。その時に何もしていなければ、『手のかかる子』と苦勞していただけかもしれません。

それから週2回の療育に通うようになりましたが、連れていくのは一人だけなので、もう一人は同居している母に任せていました。同じ頃にパートの仕事をしたので、パートに出る時は、二人を母に見てもらいました。今は保育園に言っていますが、やはり、母にお迎え等手伝ってもらっています。なので、一番の協力者は母です。性質の事も理解していますし、私の愚痴もちゃんと聞いてくれます。いつでも話を聞いてくれる人がいるのは、私のストレス発散にもなり助かります。

保育園に入ってから、拠点園なので同じ悩みを持った人、理解者が増え、情報交換もできます。園の先生は、どんな話も聞いてくれますし、『なんとかしよう』『どうしたらいいか』と、一緒に考えてくれます。

今後は、就学についての問題がありますが、家族、友人、園の先生、療育の先生と話し、情報交換しながら解決していきたいと思っています。

娘の学校体験記 (バンネーム/ハイツ)

うちの娘は小学校中・高学年くらいからよく、お友達と衝突をしていました。娘は相手の言葉の理解力が不足しています。取っ組み合いの喧嘩程にはならないのだけれど、少し不安があるとそっちが気になってしかたない性格と、相手の言葉を記憶にとどめない性格の娘です。だからお友達と衝突して、変ってる子だと思われていたに違いありません。6年生の時、男の子と衝突しました。

それがきっかけで、小学校の最後を通級学級と普通学級の半年間でした。

このままでは、いけないと、ギリギリになって中学校への進学について考えました。

環境を変えることはもしかしたら問題を大きくすることかもしれません。でも、今

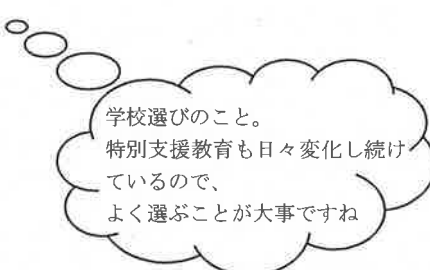
の状態、同じ子ども達のいる同じ学校へ入れることに、私自身不安もありました。そこから娘に向けた中学校を探し始めました。近隣では、ありませんが希望の中学に入れることができました。

そして現在、娘は、その学校へ通っています。

この中学校の体制が整っていることが、親にはかなり安心材料になっています。

うちの子どもは特別支援のクラス半分、普通学級半分で学校生活を送っています。お友達との行き違いはないとは言いませんが、子どもの変化に先生方の対応の早さが救いになっています。

学期ごとの保護者会での、学校での様子や、今の困り感など、正直に話してくれる先生方に恵まれて、この学校を選んでよかったなと思います。



学校選びのこと。
特別支援教育も日々変化し続けているので、
よく選ぶことが大事ですね

息子の登校体験記 (ペンネーム/パーター)

一般的には、不登校の子に登校刺激をしないで、そっとみまもってあげるのがいいとされています。が、発達障害の必要な子についてはいつもそれがあてはまるわけではないそうです。

私の息子も、中学生の時不登校でした。子どもは不登校でいることに、なんの焦りもなく、毎日を楽しんで過ごしていました。これは？と思い、親としての感から、『学校は行かなければいけません』という方針で説明しました。ある時、佐藤暁先生の講演会があり、その時に登校刺激について質問してみました。発達障害の必要な子については、やはり登校刺激をする事が必要なことだというご意見でした。その言葉に勇気付けられ、少しずつ外出して、学校の図書館や通級教室などにいけるように促しました。そして、私の息子は全日制高校に入学して、現在高校3年生です。

楽しく毎日学校に行っています。子どもは、ひとりひとり個性があります。親が見守って、刺激をしたり、そっとしてみたりして、大切に育てていくことが大切です。

そしてそれは親の生きがいでもあります。個性がある子どもの親だからこそ先生や親同士との繋がりにも、恵まれ、そこに、幸せな関係があります。

沢山の人に出会い、ここまでがんばれた (ペンネーム/しんべいのお母さん)

息子の障害がわかってから、つらい、苦しい、切ない事などありすぎて前を向くことができない時期もありました。それでも沢山の人に出会い、助けられてここまでがんばれたんだと思います。一緒に悩んだり泣いてくれた担任の先生、「この子はいい子」と言ってくれた近所のおばちゃん、声をかけてくれ、受け入れてくれた交流クラスの友達、弟の友達のお母さんに話すことで理解をしてもらい、弟と同じように遊びに連れて行ってもらったり……。それに親の会などで知り合った同じ悩みを持つお母さんの存在は本当に大きかったと思います。一人で悩んでしまいがちだけど、勇気を出してこんなことに困っていると口に出し、助けてほしいと願えば答えてくれる人は必ずいます。

今まで助けてもらったように、次は私が誰かを助けたいと思って、今、特別支援員の仕事を一生懸命、がんばっています。

悩んで苦しんだ事、無駄ではなかったと思っています。

これからの方に… ～一歩先に行く家族の体験記～ (ペンネーム/ははねこ)

☆祝二十歳☆

4才の時にお店の看板の文字を“線の組み合わせによる記号”として興味を持ち、クイズ感覚でひらがなをマスター。お店やさんごっこで「Aぎょう中」「Qぎょう中」の看板を作り、発想の柔軟さに感心する。

幼稚園では、大人びていて、優しくしっかり者の彼はクラスの人気 NO1。しかし小4の時、友達とのじゃれあいが苦手で「そこにいる意味がわからない(※高3での回想)」と休み時間がしんどくて不登校になる。新年度になる度リトライするが上手くいかず、級友に恵まれた中3で遅刻・欠席を繰り返しながらも学校に復帰。「パ

ソコンと物作りが好きだから」と、県立の工業高校に進学した高1の夏休みにアスペルガー寄りの広汎性発達障害と診断される。『アスペルガー症候群の子はその高い能力が苦手をカバーするので、気付かれにくく、診断が遅れる傾向にあるんです』とも。高校生活は居心地がよく、理解ある先生方に見守られ「これだけ資格を取った生徒は近年にいない」と言われるほどの資格検定に合格。ポイント制なので本人はゲーム感覚。明確な目標と達成感が励みになったらしい。ポイントを貯めて岡山県知事顕彰や全国工業高等学校長協会の表彰を受け、また高2からはスーパーの食品レジでアルバイトを開始。バイト代を本人に持たすと衝動買いですぐ使ってしまうので、母が管理することにより車の運転免許取得の費用の約30万円を自分で用意した。

高校卒業後は県外の企業に就職し、現在独り暮らしで頑張っており、今年の年末は同僚とハワイに行く予定だとか。今後は特性を理解してくれるパートナーに巡り会えたらいいなと思う。

☆花の高校3年生です☆

幼稚園のお招き運動会で走っている途中に突然固まって動かなくなってしまった4才の彼。卒園式の練習が始まると原因不明の微熱が続き、結局卒園式は体調不良で欠席。しかもテレビ取材があったので、夕方のニュースで空席のイスを見て「あそこにいるはずだったのに・・・」とちょっぴり残念そう。

小3では「他の子を注意するとピリピリと反応していてしんどそうです」と担任。その秋から中3まで不登校になり、小6から市の適応指導教室で過ごす。『ですます調』でしゃべり、ほんわか雰囲気「癒し系」と大人受けがよく、中2の時に妹に診断が出たので、兄と一緒に発達検査を受けたら、高機能自閉症タイプの広汎性発達障害と診断される。幼稚園前後の出来事は指示が分からなくて本人は困ってたんだ。

中3は特別支援学級に籍を移し、部活動にも取り組み、定時制高校夜間部に進学。中2と高2の時の担任からは「お母さん、どうやったら彼のように丁寧な、優しい子が育つんですか」と聞かれ「それが高機能タイプの特徴です」と苦笑する母。

現在は運動部の部長をしながら文化部にも所属。生徒会役員もこなし、級友宅に泊まりに行ったり、一緒にカラオケに行ったりと高校生活を楽しんでいる。「4年かけて卒業したら就職ね」の母の方針のもと、その日に向けて意識作りをしている。

☆第3子・中1です☆

幼稚園への行き帰り「動物園から逃げた〇〇が追いかけてきたよ」とごっこ遊びをしないと歩かない。景色や通行人に興味を示さない、なんか変わっていた娘。

小3の1学期、漢字ドリルの宿題の途中で固まってしまい動かなくなる。担任に相談しても「4文字することに意味がある」と量が減らせず、仕方なくやり残して提出すると「しなさい」「やりなさい」と付箋をペタペタ貼られて困っていた。そんな時新聞で『宿題の途中で動かなくなり、させようと子供に手を上げてしまう。かかりつけの小児科で、頭の中が忙しくて体の動きが止まってしまうタイプのADHDです。手をかけて育てて下さいと言われた』という投書を見つけ、状況がよく似ているので早速児童相談所に電話をし、2ヶ月待ちで発達検査。「発達に偏りがあり特別支援学級も可能」の判定。「診断書が必要なら病院を紹介しますよ」と言われ、診断書はお守りなので持っておくべきだと思い、またその時「長兄が友達とのロゲンカで腹が立ち、壁に直径10cmの穴をあけている」と相談すると、気になるので発達検査を受けることを勧められ、病院を紹介してもらった。

特別支援学級に在籍することには『将来マイナス材料にならないか』と不安があったが、「そのことでとやかく言う人とはご縁が無かったと思えばいい。分かってくれる人に分かってもらえればいいや」と思うことにし、クラスがしんどくてすでに不登校気味だったのと、本人にとって過ごしやすい環境の整備。何より大好きだった去年の担任の先生が特別支援学級の担任をされており、休み時間によく遊びに行っていて、本人の中に特別支援学級への偏見がなかったのが救い。夏休み中に手続きを済ませ2学期から特別支援学級に籍を移す。

しかし、家庭環境の問題もあって不登校状態がなかなか改善されず、4年生から通室している適応指導教室も休みがち。6年生の時の担任が母をサポートしてくれたこと、放課後登校を毎日受け入れてくれたことで、良い形で小学校を卒業できた。

中1になった我が家の『夢見る夢子ちゃん』はマイワールド全開中。成長する中で人とも関わりが持てるようになり、写真部では花と雲の作品がライフワーク。

次兄の楽しそうな高校生活の話や文化祭で活躍する姿を見て「同じ高校に行きたい」と目標もでき、少しずつ成長している。

☆そして母☆

写真をみると幼稚園の頃から不器用。右と左がいまいち分からず体育の「回れ右」は人の動きを見てからなのでワテンポ遅れる。運動会のラジオ体操は何度も練習するうちに体がなんとか覚える。上下・前後は分かるのに左右は何故か分からない・・・どうしてみんなは簡単に出来るの??

4年生の頃からみんなと何かが違うと漠然と感じる・・・。

小5・6の担任に「宿題が間に合わない」「一言日記が書けない」「話を聞いていない」「やればできるのに何故しない」など、毎日できないことを指摘され続け登校拒否寸前まで追い込まれる。「消えてしまいたかった」と傷ついた過去を持ちながらも、中学・高校は楽しく過ごす。事務員として就職するが、いろんなことがこなせず仕事がどんどん溜まり、とうとう上司に「せめてこれだけはやってくれ」と言われる始末。

自己肯定感が低く、自分の言動に自信がなかった私は40才前にして広汎性発達障害と診断される。医師が「私の友人にもADHDの人がいますが、特性を上手く利用して立派に社会人してますよ」と慰めてくれるので「先生違うんです。あの時の出来なかったのが自分の努力不足のせいではなく、別の理由でおきていたのが分かって嬉しいんです！」と診察室で片手でガッツポーズ!!

ただし、診断はあくまでも出発点。特性を勉強していくなかで子供達にも『あるな』と感じ発達検査を受けさせる。『診断は烙印やレッテルではなく、理不尽な叱責から身を守るお守りです』と子供達にはすぐ告知をし、ちょっと人とは違う部分を持つて自分と上手につきあっていくようサポート。

もっと早くに分かっていれば二次障害の不登校は防げたかも知れない、二男は卒園式に出れたのに…という思いはあるが、気が散りやすく流されやすい長男には「今することだけに集中させる」「切り換えが苦手なのでタイマーを使う」など、傾向に対して医者からアドバイスをもらったり、診断名があることで行政から支援を受けたりしながら『この子達はゆっくり育つ子』と自立と自律に向けて頑張っている。

じっとしていない、あるいはぐずってばかりの困ったちゃん達を幼少の頃は1日中おんぶしていた。まさに『背中であんな子』は今落ち着いた子に育っています。一番落ち着いていないのは私で、あっちこっちに首を突っ込んで娘に呆れられるものの逆に長男には感心してもらい、日々奮闘しています。

第3章 発達障害の子どもたち・保護者を サポートする側から～メッセージ・活動紹介～

活動を通して 彼らの素敵な一面を知る

(ペンネーム/そら)

Yくんは4月からにじ色ヨーガに参加している小学1年生の男の子です。ヨーガより電車に心ひかれる様子で公民館の図書コーナーで、電車の絵本を見つけ読みふけていました。電車の車体名を的確に言いながら、ページをめくるYくんがあまりに楽しそうで、私もその仲間に入れてもらおうと電車の名前を聞いてみました。そのひとつひとつにYくんは丁寧に答えてくれて、私も調子に乗って

「これは何?」「キハって何のこと?」「シングルアームパンタグラフって?」

と次々にYくんに質問を…

するとYくんは席をたち、暫くして雑誌を1冊かかえてきて

「はい、これをどうぞ読んで、僕はこの本読むね」

きっと、Yくんは一人でゆっくり大好きな電車の本を読みたかったのでしょう。そのことを相手にどう伝えたら良いのか、気分を害せず、自分だけでなく二人がよい時間を過ごせるようにと考えてくれて…そして、こんな思いやりに満ちたコミュニケーションをとってくれました。

「発達障害は人との関わり苦手とする」とよく言われますが、活動を通して彼らのこんな素敵な一面を見せてもらっています。障害を障害たらしめているのは、周りの対応であったり偏った見方であったりするのだなぁと感ずるのです。

それから持って来てくれた雑誌が『家庭画報』…美容室のスタッフ並みの適切なセレクトです。

みんなががんばってます！！

光南台公民館では、「人・ふれあい・ひろば」の発展系で、有志が集まり職場体験を、子どもたちといっしょにがんばっています。

発展系第2弾、ちゃれんじ会も立ち上げました。音楽、茶道、花道、料理、手芸など特技を持つ親が講師になり、子どもたちといろいろな体験をもとうという会です。今は月1回、歌を歌っています。

(ペンネーム/Sさん)

きのこの会

(たけやり子ども発達研究所 サポートグループ)

親の会です。武鑑先生を中心に情報交換や親睦会、親の特技を生かして子ども達といろいろな体験を楽しもうとがんばっています。6月は、簡単にできるパンを焼きました。11月はフリーマーケットに参加し、バーベキューパーティーもまだ未定ですが、考えています。

(ペンネーム/Sさん)

おもしろ子育て奮闘記

～よんで元気になる体験談～

体験手記、メッセージを掲載させていただいた会のみなさま

- ♪ ほっとほっと (旭東公民館クラブ講座)
- ♪ 人・ふれあい・ひろば (光南台公民館主催講座)
- ♪ きのこの会 (たけやり子ども発達研究所サポートグループ)
- ♪ NPO法人ジョブサポート事務局そら
- ♪ さくらのはあと (藤田学区子どもの自立を応援する会)
- ♪ 子育て茶話会すまいる (灘崎公民館で活動する親の会)
- ♪ 岡山県自閉症協会
- ♪ アリスとうさぎの会
- ♪ よつばの会

【裏表紙絵】『えんそくの思い出』前田 智也

